二〇二五年度　一般選抜　Ⅳ日程

国語

Ⅰ

出典

中尾悠里『AIと人間のジレンマ――ヒトと社会を考えるAI時代の技術論』〈chapter2　人工知能の思想　3　人間の他者である人工知能を社会の中で受け入れるために〉（千倉書房）

解答

問1　1―③　2―①　3―②　4―⑤　5―⑥　6―④

問2　ア―④　イ―①　ウ―③　エ―⑤

問3　④

問4　A―④　B―②　C―⑤　D―③

問5　a―①　b―⑤　c―②　d―③　e―④

問6　③

問7　⑤

問8　②

問9　①

問10　④

問11　③

© Sekaishisosha-Kyogakusha Co., Ltd.
無断複製・転載を禁じます。

解説

問3　傍線Aを含む段落の二段落後に「従来の科学観」について、「実験などを用いて…分析可能とな」るとある。これが「通常の自然科学」の方法であり、その次の段落の「人間が行うさまざまなタスクを高い成功率でクリアする技術をつくり」、「分析は実際にうまくいった後で行われる」のが「構成論的アプローチ」である。④の内容が合致している。

問6　空欄Ⅰの直後の「木を無限に伐採することが環境に悪いことだと宇宙人たちは思わないかもしれない」から考える。

問7　傍線Bを含む段落の直前の段落に「自律的なAIができたとしても、人間と同様に考え行動するという保証はない」「AI技術は人間並みかそれ以上…人間と協調する知能をつくることとはイコールではない」とあることから、⑤が正解。①と②は「言語を持たない」、「人間と同じ価値観を有する」が、それぞれ不適。③は「AI」が「人間以上の知能を持つ」というのは「誤った認識」ではないので不適。④は「AI」が「非協力的」であるとは言っていないので不適。

問8　「これ」とは、傍線Cを含む段落の前段落にある「専門家と非専門家」が「互いが互いの他者となっている」ことを受けてのもので、「技術の実用性という意味」で「非常に問題」だと言っている。「AI技術」の「評価基準」が「統制環境で得られた結果」なので、「実環境のデータで成り立つとは限らない」から、「現実の汚い状況で使える簡素で古典的な方法が好まれる」場合もあって問題だと言っていることから、②が正解。①は「無用の技術」が不適。③は「対立し合っている」わけではないので不適。④は「技術の評価」はしていないので不適。⑤は「どんな状況下でも…開発されたとしても」とは言っていないので不適。

問10　「専門家」について、傍線Dを含む段落の二段落前に「専門家は…単独で決めることは本質的にはできない」とあり、最終段落に「専門家がなすべきことは自らが与えられる情報の限界を認識しながら、社会に対して条件付きで信頼できる情報ソースを与え続けること」「専門家と非専門家は…対等な関係として…議論を進めるべき」とある。こ

© Sekaishisosha-Kyogakusha Co., Ltd.
無断複製・転載を禁じます。

の内容に合致している選択肢は④である。

問11 ①傍線Bを含む段落の前段落に「AI技術は…知能を目標としているが、それは人間と協調する知能をつくることとはイコールではない」とあるので、「人間と完全に協調できる知能を作る」は不適。
②「専門的な理解が全くできない技術」は空欄Cを含む段落の内容に反している。
④空欄Ⅱを含む段落に「専門家との協業が不可欠」とあるので、「技術を提供した後で」は不適。
⑤「技術力に差がある」のではなく、専門家は「技術開発」、非専門家は「技術を使う実践領域」というように立場が異なるのである。

Ⅱ

出典 『日本霊異記』〈下巻　第十三〉

解答

問1 ア―① イ―③ ウ―⑤ エ―② オ―④
問2 い―② ろ―① は―③
問3 a―⑦ b―⑤ c―④ d―① e―②
問4 ④
問5 ①
問6 ④
問7 ⑤
問8 ④

解説

問2 **い**、「掘り取らしめ」の「しめ」は使役の助動詞「しむ」の連用形。「役夫」に鉄を持って帰らせることはないので、

© Sekaishisosha-Kyogakusha Co., Ltd.
無断複製・転載を禁じます。

④は不適。

ろ、「給はば」の「ば」は未然形に接続しているので、順接の仮定条件。「全くす」は〝完全に果たす〟の意。「命を全くす」は〝寿命をまっとうする〟という意味で使われることが多いが、前後の文脈から考えると、①が適切である。

は、「更に」は下に打消の語を伴って、〝決して、全然…ない〟の意になる。

問4 傍線Aの後の沙弥の言葉から考えればよい。「汝の妻子、我に飲食を供へ…汝また泣き憂ふるが故に、我来たる」とある。④の内容がこの言葉に合致している。

①「妻子に会えずに死ぬことを覚悟」が不適。

②「夫の死を乗り越えようとしている」とは書かれていない。

③これは④と似た内容だが、妻子は「夫の無事」を願っているだけではなく、「勧め救はしむ」とある。

⑤「我に飲食を供へ」とあるように、妻子が用意した食事は観音への供物であり、「夫の食べ物」ではない。

問5 傍線Bの直後に「底の人取りて引く。明らかに人なりと知りぬ」とある。正解は①。

②「引き上げて救い出すため」にしたのは、人だとわかってから「葛を結ひて縄」を作り、それに籠をつけて下ろしたことである。

③「石をぶつけて退治する」が不適。

④「大きな声を出すよう」に促してはいない。

⑤「穴を空けた方法」を見せてもらおうとはしていない。

問6 「汝、いかなる善をかなせる」という問いに対する答えであり、それを聞いた「国の司」が「大きにあはれび…供養する」ことになったことをふまえれば、「吾、先の日法花大乗を写し…我、必ず果たし奉らむ」という内容に合致する④が正解である。

問7 傍線C以下の内容に合致する⑤が正解。

© Sekaishisosha-Kyogakusha Co., Ltd.
無断複製・転載を禁じます。

①「妻子…経を写し福力を追贈して」とあるので、「死んだと思ったが、妻子だけは信じなかった」は不適。
②「妻子は…人生の中で最も深い悲しみを感じた」とは述べられていない。
③「居たる頂に当たりて、穴開け通り」とあるように、鉱山の出入り口ではなく、役夫の頭の上に穴があいたのである。
④「葛を編み上げて籠を作」ったのは「役夫」ではない。

© Sekaishisosha-Kyogakusha Co., Ltd.
無断複製・転載を禁じます。